

葬儀で使う遺影を、生前に自分で用意する人が目立ってきた。写真館で、誕生日などに楽しみながら撮影するのもよさそうだ。自分らしい、お気に入り一枚を残したい。

遺影といえば、正装で正面を向いた顔の写真をイメージするが、最近は旅行やゴルフなど趣味を楽しんでいる様子の写真、全身を引き伸ばした写真など、多様化している。

「メモリアルアートの大野屋」(東京)で葬儀の事前相談を受けている三井桂子さんは、「家族葬の増加などで、故人の人柄が伝わる写真が使われるようになってきた」と話す。生前に自分で用意する人も目立ってきたという。

手持ちのスナップ写真を引き伸ばして使ってもいいが、顔の輪郭がぼやけるなどして修整や加工が必要になり、不自然な印象になることもある。そのため、「写真館で撮っておくと、自然な遺影になるでしょう」と助言する。

一般の写真館でも撮影できるが、遺影撮影プランを設けているところもある。兵庫県姫路市の写真館「イズム・ベーシック」は、オーナーでカメラマンの石田直之さんが、2年前に始めた。

プランは撮影料(プリント代別)が8400円から。利用者は60、80歳代が中心で、夫婦や親子で来る人が多い。館内はソファなどを



納得の遺影 生前準備

自分らしい1枚残して

置きくつろいだ雰囲気、1時間ほど世間話をしながら撮るため、自然な表情となる。「大人になると記念写真を撮らなくなりますが、何年かに1度、誕生日などの記念日に撮影してみても」と石田さんは話す。

石田さんは、がんの闘病中だった父が病院帰りにふらりと店に立

ち寄ったとき、何気なく撮影した写真を葬儀で使った。「父らしい表情を残せてよかった」と石田さん。自宅に飾って、時々、写真の父に語りかける。「撮ったときの情景、会話などがよみがえります。家族が元氣なうちに撮影することをお勧めします」

一方、「写真写り」が気になる



プロに化粧をしてもらい、華やいだ表情で撮影に臨む女性。体の向きや姿勢によっても雰囲気が変わる(オプシス日比谷本店)＝安川純撮影

- 遺影写真を選ぶ、撮る時のポイント
 - ・手持ちのスナップ写真から選ぶ場合、顔が10円玉より大きく写っているものにする
 - ・服装や表情は自由。自分らしいと思うスタイルでいい
 - ・撮影時の年齢はあまり気にしないでいい
 - ・葬儀後に自宅に飾られることも念頭に置く
 - ・撮影する写真館は、店頭やホームページの写真を見て、好みの雰囲気の写真のあるところを選ぶ
 - ・数年ごとに撮り直すと記念にもなる
 - ・使う枚数や大きさは、葬儀の規模や内容に合わせる
- (三井さん、石田さんの話を基に作成)

女性は多いだろう。東京の写真館「オプシス日比谷本店」では、撮影用のヘアメイクを施してくれる。大阪市内にも店舗があり、撮影料は1万5000円(プリント代別)。

高齢者のメイクのポイントは、①ファンデーションは肌になじむ色を選び、顔と首の色が違わないようにする②頬骨の高い位置にチークを入れる③口紅は真っ赤ではなく、顔色が明るく見える落ち着いた色を選ぶ――など。

撮影時の姿勢にも注意したい。背筋を伸ばし、胸を張る。表情は、口角を上げ、自分では少し大きげさだと思ふ程度の笑顔を作る。「化粧をすることで気持ちさが若返り、自然に生き生きとした表情になります。子どもや孫と撮影に来れば、家族のコミュニケーションにもつながります」と、同店の山本知恵利さんは話す。